

家庭において親は本人に対してどのように対応していけばいいのか

「ひきこもり」家族への支援：「対応を学ぶ」講座に関する検討

Parents' support behavior for HIKIKOMORI in home

上田陽子

UEDA Yoko

立命館大学人間科学研究所

(Institute of Human Sciences, Ritsumeikan University)

Key words: HIKIKOMORI, parents' support behavior, First Step Job Group

目的

「ひきこもり」が社会的に注目されてほぼ10年を経る。その間、親が家の中で本人に対して「どう対応していくのか」といった基本的部分についての具体的な提案は既存の支援でほとんど示されていない。親は、支援機関や親の会や講演会で学び「ひきこもりについては頭にいっぱい知識が入っている」しかし「家へ帰り、本人を目の前にしたとき何も変わらない、どう対応すればいいのかわからない」(S 親の会代表の言葉,2008)といった状況である。そこで、親の具体的な対応方法の習得を目的に、FSJG (ファーストステップ・ジョブグループ)の枠組みに基づく講座(家族勉強会「対応を学ぶ」)を開いた。本研究では、講座の効果の検討と、今後このような講座に取り組む際の課題を検討する。

方法

1. 対象者：FSJG 主催講演会参加者のうち「親」を対象に募集し、参加希望した親7名(以下、講演会組)復習のため参加したFSJGメンバー7名。計14名。
2. 講座内容：週1回3時間で全3回行った。各回項目毎に説明し、具体例ではFSJGメンバーに発言を求め、課題を話し合う時間、課題を行う時間を設けずめた。「行動は個人と環境との相互作用」の視点で捉えること、その技法的な点、「ひきこもり」の日常場面での課題、対象者個別の課題を取り上げた。各回内容を以下に示した。
(1)第1回：1)ひきこもりを取り巻く状況2)親として援助者として(今を認める・親の行動が変わる)3)行動の捉え方(先行行動結果)4)根拠となる価値観「罰なき社会」(Skinner,1990)輪読
(2)第2回：1)社会的悪循環「つい言ってしまう」親の行動が本人をよりひきこもらせる。行動随伴性で捉える。親の行動は何で維持されているか、子の行動は何で維持されているか、「つい言ってしまう」親の行動へはどうすればいいか2)問題行動(具体例)考えられる適切な対応は?3)「できる」を創る。「できるに注目する」ことをする、好ましい結果が得られる行動の機会を創る、「できた」という達成感、達成体験積み重ねる4)宿題、我が子の生じた行動を (起きた行動を具体的に ど

のような状況で起きたか? 行動を起こした結果、何が起こったか?親はどう対応したか?)で記録する。
(3)第3回：各家庭における対応1)宿題報告2)「家においてもできる仕事の可能性」について

結果

対象者(講演会組)7名のうち、第3回出席者は、短期若年ひきこもり(年数4~5年、20才前半)親3名、長期高年齢ひきこもり(年数15年~、40才前後)親2名だった。a宿題遂行b.注目(できる)c.先行行動結果で捉えるd.環境の工夫e.仕事の創出f.行動(仕事行動)の拡大へ、で検討した。短期若年親3名に本講座の効果が認められた。長期高年齢親2名には認められなかった。

考察

長期高年齢親に効果が認められなかったのは ~ によるものと考えられる。長期化=「なぜ出ていけないの」と「できない」に注目し続けている状況 否定的から肯定的へ短期間(3回)での方向転換容易でない 継続中の援助は「できない」が基本、「できない」に注目する行動が長年にわたり強化、維持 講座内容、拡散し個別の技法不徹底 観察・記録は各自メモ使用。 は短期若年親にとっても同じ条件であり、長期高年齢親に限れば『「できない」に注目』が挙げられる。今後の講座設定については『「できる」に注目』を主眼に、ひきこもり具体例多用し、先行行動結果で捉える練習 記録シートを用い具体的に記入(親が課題みつけやすい) FSJGメンバーによる記入サポート、評価(親にも、「できる」を創る・達成感) 講座期間増、開催頻度増、が考えられる。それにより、短期若年では長期化することなく回復可能へと導ける 長期高年齢では講座後も親の行動維持のためFSJG的機能もつグループが必要と思われるグループ結成支援が課題として残る 「講座」と「FSJG」の組み合わせでひきこもり支援がより充実 プログラム化の可能性を検討できる、等を示されるものと考えられる。

参考文献

望月昭・上田陽子(2009) . ファーストステップ・ジョブグループ (FSJG) : 対人援助学的「脱ひきこもり」支援 ヒューマンサービスリサーチ 16 立命館大学人間科学研究所